



とある研究所。

コート型の白衣を羽織った複数人の研究者たちがテーブルを囲んでいる。

「つ……ついに出来ましたね、常識を覆す新薬がっ！！」

「全身が打ち震えそうだよ。これを見てくれっ……」

所長がテーブルの上に差し出した自らの手の甲。

開発のために研究所に籠り続けていたことで日光に当たることのない真っ白なその手は小刻みに震えていた。

そしてその横には小さな箱に入った紫色の怪しげな錠剤が……。

「残った問題は劇薬とすら言えるこの薬を誰が最初に使用するか……その一点だけだ」

世は新世代のスポーツ科学によって、様々な競技分野で新記録を目指し、新しいパフォーマンスを試みる“アスリートブーム”だ。

そんな中、陸上界の“短距離ハードル走”で将来に多大な期待を寄せられている一人の女性アスリートがいた。

彼女の名前は“リディ”。

彼女は幼少時から突出した身体能力を示し、図抜けていた特別な存在だった。そんな彼女の能力は才能の卵を探していたスカウトたちの目に留まり、結果リディはエリートコースを歩み続け瞬く間に陸上界のホープとなった。

そしてさらに……。

彼女は他のスーパースターやホープたちと比べて、もう一段上の別次元の存在でいるための要素を持っていた。

それは……。

“超人的な肉体を手に入れるための新薬を世界で初めて使用した人物”

であることだ。

この新薬はこれまで多くのスポーツマンたちが違反で使用してきた“ドーピング”などと呼ばれる薬物とは別物だ。

この新薬は身体に薬物反応などが出ない。

そして何より大きな違いは、細胞単位で肉体が生まれ変わり、そして二度と元には戻れなくなること……。

では具体的にどのように肉体が変わるのか？

例えば0.1秒の更新で大いに歓喜する世界である100メートル走で言えば、摂取して2週間もすれば特段トレーニングすらせずとも1秒近くもタイムを縮めることが出来る。

更にその後トレーニングを積もうものなら、その発揮能力は無量大だ。

まさに人間の肉体そのものを別次元のものに生まれ変わらせてしまう特効薬なのだ。

しかし……この薬は“劇薬”とも呼ばれていた。

何故ならば……。

「ここからが重要なんだリディ。君だから飲んでほしいという我々の強い想いは分かってもらえたかね??」

「ずっとそれだけの意気で説得され続ければ分かるわ。私に能力があるからでしょ？」

「そういうことだ。では打ち明けるよ、重要なことをね。この薬には、“尋常ではない側面”があるんだ!!」

“例えるならそれは短時間で燃え尽きるファイアーワークさ”

“リディいいかい？仮に僕たち常人の肉体が小さな炎を灯したままゆっくりと消えてゆくロウソクの炎ならね、この薬を飲んだ人間の肉体は弾けて消えるファイアーワークのようになるのさ”

“誰よりも激しく高く大きくそして赤い炎を上げて、そして散ってしまおう。それはとても悲しいという見方も出来るだろう。だけど、君にはそうなるための覚悟を持ってほしいんだ。君しかいないんだよ”

肉体が激しく燃え・・・そして尽き果てる。  
それがその新薬が劇薬と呼ばれる所以だった。

この新薬を飲んで向上するのは身体能力だけではない。

“性欲”と“食欲”が常人をはるかに上回る強さに変わる。

つまり、人間が持つ3大欲求のうち“睡眠欲”を除いた本能的欲求が通常のレベルを大きく逸脱するほど高まり、そしてとても自分ではコントロール不能な状態になるのだ。

改変した肉体は超人的身体能力と異常な性欲そして食欲を生み、そして激しく燃え盛った後に死んでしまうというわけだ。

そして具体的には、その薬を飲んだ人間がまず5年間以上生きることがあり得ないと予測されていた・・・。

リディは使命感が強く、そして誰よりも果敢な心を持った女性だった。

そんな彼女だからこそ、誰でも怖気づいてしまいそうなこの提案にもほとんど迷う様子を見せず、覚悟を決め承諾したのだ！！

リディが承諾したとなれば、実行までの流れは複雑なものでも何でもなかった。

それも当然のこと。要は処方された薬をブリスターパックから取り出して飲むのと同じように、見た目など風邪薬と何ら変わらない小さな錠剤を口に含んで一気に飲み込んでしまおう、それだけだ。

劇薬であり特効薬のその錠剤を飲んだリディの体にはすぐにその作用が現れた。

「あああ・・・苦しいわっ！！眠れないの・・・！！」  
訴えるように毎晩叫び、そして付き添いのトレーナーに言葉にならない苦しさの処置を懇願する日々がしばらく続いた。  
眠ってもうなされ起きる。しかしどうすることも出来ない。  
リディにとっては地獄のような日々が続いた。

薬を飲んだ後の体にしばらく起こるこの苦悶のことについて、事前にリディは伝えられていた。それを承知の上で覚悟を決めたのだ。

そして・・・。

リディは苦悶の日々をなんとかやり過ごし、強いそのメンタリティによって峠を乗り越える。

・・・そしてついに！！

**リディの全てが花開く時が来たのだ！！**

「なんだか凄く清々しいわっ！！ようやく私、新しい自分になれたのね」

照りつける太陽がまぶしい朝。

前日までの苦しみが嘘のようにすっきりと目覚めたリディは、そのムチムチの肉体が大きく露出するスポーツウェア、具体的にはショート丈のタンクトップに短いレギンスを着て、それまで通っていた彼女のトレーニング場所であるアスレチックトラックに出た。

大きく伸びをして青い空を眺めたリディ。

“この体にどんな変化が起こっているのだろうか？”

楽しみで仕方がない。

そして、踊る心の望むままにリディは走り出した。

！！！！！！！！！！

「うむ・・・やはり凄いな」

「凄いどころか！！想像以上ですよ所長っ！！こんな・・・これほどまでとはっ・・・！！」

リディは新しく生まれ変わった肉体でトラックを駆け抜け、その日中に以前自らが持っていた記録を一気に更新して見せたのだ。

その日からのリディは、まさにその薬の凄まじき効果をそのまま現わしていた。

日々鋭意トレーニングに励むリディ。筋骨の改変ぶりは並々ならぬもので、まるでアップグレードされた人工機器のよう。

当然のように留まることなく記録は伸び、モチベーションは高まって更にトレーニングに励む、という上昇循環が続いた。

そして時を経て、リディは若くして専攻種目のハードルで世界新記録を樹立。

年齢はまだ21歳だった。

それどころかその他のいくつかの種目でも、圧倒的な新記録を立て続けに生み出していったのだ。

「彼女は希望の星ね・・・」

「はははっ・・・今更何を！！」

「アスリート界だけのことを言ってるんじゃないわよ？」

「・・・そういうことか・・・」

「“人類の歴史”において、彼女は新しい一歩を先陣切って踏み出してくれた勇敢な女戦士だわ」

劇薬の側面を持つ新薬の試みに勇敢な心持で挑んだリディ。

リディが新薬を摂取したことについては世の大衆にはトップシーク

レットとして明かされていなかったが、彼女が英雄であることは変わらなかった。

リディは陸上界においても、そして薬の開発側からも、同様にヒーローとして崇められたのだった。

“人類史上に残る先駆者”

“いつまでも残る名前”

そう、彼女は英雄になった。永遠の英雄なのだ……。

……と、そんな美しい側面が存在した一方で、リディが味わったもう一つの側面があった。

忘れてはおられないだろうか?? 肉体を別次元に改変し、能力を上げるというその薬のもう一つの側面とは……そう、人間としての本能である“食欲”“性欲”の二大欲求を、常人をはるかに逸脱するほどに高ぶらせること。

これは世界的なプロジェクト。よってリディには与えられるものは全て与えられた。

例えば食に関しては、常に何十人もの専属シェフが付き添って、リディが食べたい物をどこまでも自由に食べさせた。

「もっと!! ンハム・ハムムシャムシャ・もっと肉を持ってきて頂戴!! もっと!! もっともっと食べたいわっ!!」

———体験版はここまでです———